

「庭園鑑賞のここがツボ」入門

～ 景観解析とは何か、この視点で庭を見てみましょう ～

season 1 前庭・ロータリー庭園 編

はじめに

美術館や歴史的建造物などを鑑賞する際、予備知識を持った場合と、そうでない場合とでは大きく違います。庭園についても同じようなことがいえます。「美しい庭」「きれいな景色」などの感覚的な感動だけでなく、景観の構成を理解することで、さらに味わいを深めることができます。ここでは、正門から玄関に至るまでの庭園を中心とした景観について解説を加え、学校庭園の鑑賞をより楽しめるようまとめました。

庭園は美術品や歴史的建造物と同じように芸術性の高い作品といえます。室町時代後半に作られた京都竜安寺の枯山水方丈庭園、江戸初期の桂離宮庭園などは、日本の美を代表するものとして、日本文化を説明する際によく取り上げられます。特に竜安寺方丈庭園は単純な構成でありながら、日本人特有の美意識を見事に表現しており、現代デザインから見ても遜色のない作品だといわれています。



◆トチ並木とツツジによる緑のトンネル

本校の庭園、とりわけロータリーを中心とした前庭は大変素晴らしいものだといえます。この鑑賞ガイドを参照し、景観の構成について理解することで、楽しんで頂けたらと思います。

学校正門から続くトチ並木は50mを超す長さ。幹の太さは直径50cmを超す立派な木です。この緑のトンネルを通りぬけると正面玄関前のロータリー庭園を中心とした前庭が広がります。この前庭は同窓会創立記念に造られた壁泉、ロータリー庭園と芝生からなる西洋の自然風景式庭園などで構成されています。この学校の顔ともいえるこの前庭について、鑑賞のポイントについて少し説明します。



◆トチ並木のビスタ上にある壁泉の景観



◆ヨーロッパの自然風景式庭園

まず、トチ並木ですが、直線の道路に左右に植栽されたトチノキの高木が緑のトンネルを作り出しています。トチノキの間には高さが2m弱のツツジが植えられています。このツツジによって私たちの視線が遮られ、パノラマの景観を不可能にし、このトチ並木をビスタの景観(長い直線上の先に見える景観)にしています。つまり、トンネルの先に見える景観を意識させた構成となっています。この技法はフランスなどの整形式庭園で使われた技法です。このビスタのメインとなる景観は、鉄平石の小端積みによって作られた壁泉とその前に植えられたヤマボウシとサツキツツジの植栽となります。石と緑と水は景観を作り出す重要な要素といえます。その意味で水を景観に加える設定を壁泉で行なったことは大変素晴らしいことです。壁泉に近づくにつれ水の流れ落ちる音が響き、景観に命を吹き込み、風景に変える重要な要素となっています。景観と風景の違いですが、写真で見えるものが景観であり、五感で見えるものが風景と理解して下さい。風景はその場でなければ見ることができないものなのです。

トチ並木を抜けると一番の奥には、芝生とドイツトウヒ、コロラドトウヒなどの植栽が見えます。この針葉樹の鉛直方向に直線が伸びる景観は高緯度地域の景観といえます。一般的に樹形は、太陽の日差しを効率よく受けるため、太陽が真上を通る低緯度では枝を横に広げ、日差しが横方向となる高緯度地方では樹高を高く伸ばします。このトウヒのように鉛直方向に直線的に伸びる樹形は高緯度地方の植栽の典型的なものとなります。

芝生地は平坦でなく奥に向かって緩やかなマウンドとなっており、自然的な自由曲線のシルエットを描いています。また、この芝生地を囲む御影石(花崗岩)の縁石も同じようにゆるやかな自由曲線を描いています。この自由曲線の効果は、西洋の景観でありながら自然風景を演出すること、直線よりも延長距離を長くすることで狭い空間を広く見せることにあります。そして、このシルエットが針葉樹の森を切り開いた開放的な雰囲気を作り出しています。

余談ですが、キリスト教ではここに植えられているモミの仲間がクリスマスツリーに使われます。どうして、モミの木がクリスマスツリーとなったのでしょうか。この理由はここに見ることができます。トウヒはモミの仲間です。このトウヒの枝の一番上を見上げて下さい。十字の形になっているのがわかります。このことがモミの木がクリスマスツリーに使われる理由なのです。



◆十字形の先端



◆「農は国の本なり」石碑



◆「みのり」ブロンズ像

この庭園ですが、開放的に広がる芝生の空間と森をイメージさせるドイツトウヒ林の手前には、ブロンズ像「みのり」が設置してあります。この像の色彩は、不思議に感じますが背景となるドイツトウヒの色彩に近く、目立たないものとなっています。しかし、このことがこの像を景観に馴染ませ、庭園に絵画的な要素を作り出しています。そしてヨーロッパの壮大で厳しい自然風景の中に、優雅で人間性にあふれた生命力をアクセントとして

吹き込んでいます。景観とは見方によりフォーカス画像であり、またパノラマ画像でもあります。景観は一枚一枚の写真のようにパーツの組合せで構成されています。このパーツが全体として一体感を失わず、その中に絵画的な美しさを上手に演出することが重要です。この庭園を写真に撮ったり風景画に描くとき、おそらくこのブロンズ像を中心にするとと思います。つまり、フォーカスしたくなる景観がこのブロンズ像に設定してあるのです。このようにブロンズ像は配置、形や色彩のデザインなど見事な仕上がりです。

イギリスでは1900年頃、産業革命により自然や歴史的風景が失われ、このことの反省の中でナショナルトラスト運動が occurred。この中で「アメニティ」という言葉がキーワードとして使われました。この「アメニティ」という言葉は、「あっても特に何か特別なことがあるわけではないけれど、なくなると困るもの」、つまり「あって当たり前」といった意味です。この庭園の「アメニティ」にあてはまるものがこのブロンズ像ではないでしょうか。このブロンズ像は目立ちませんが、なかったとしたら、とても味気ない庭になってしまうでしょう。



◆豊かな水源と棚田の風景

また、これとは対照的に存在感あふれる創立100周年を記念した石碑「農は国の本なり」が設置されています。デザインは大きな自然石碑を中心とし、建物の周囲に敷かれています。いわゆる芝石を機械的に切断し、水平、鉛直方向に短い直線を集散的に使うことで存在感を演出しています。またこの芝石は石碑を囲むよう配置されており、いわゆるフレーム効果の役割も果たしています。この芝石の配置を平面図として上から見てみると、階段状になった水田のように見えます。つまり日本の田園風景、山から流れ出す川と傾斜地に広がる棚田の風景なのです。この棚田にコクリウウの植栽で稲を表現し、田植えが終わった春の風景を私たちに見せてくれています。険しい山々が涵養する豊かな水源が育んだ日本農業の象徴である稲作文化の景観を、この

「農は国の本なり」の言葉とともに表現しています。残念なことは、石碑に近づかないとこの景観を見ることができません。この石碑の裏から眺めることで、この写真のような景観が見ることができ、納得とともに大きな感動を感じて頂けると思います。

南側には鉄平石の小端積みによる壁泉があります。その奥にはエゾマツ、アオモリトドマツの高木針葉樹、その手前にコハウチワカエデやハナミズキの落葉樹、壁泉を囲うようにサツキツツジの刈り込みによるグラウンドカバー、そして近年のガーデニングを意識した自然石の敷き石とシランやギボウシの宿根性の草花の植栽となっています。景観的に見ると、右側には壁泉のシルエット、その左側はサツキツツジの刈り込みによるシルエットとなります。

庭園には具体的な景観と抽象的な景観があります。抽象的な景観は、見る人が独自に理解し楽しむものです。庭作りの世界では、よくいわれる言葉として「見立て」というものがあります。この「見立て」でこの景観を解釈してみましょう。

目の前に広がる山並み。見上げると右側には切り立った岩石からなる岩肌、そこには幾筋の滝が流れおちる荒々しい景観。対照的に左側には穏やかな緑に覆われた穏やかなスカイラインの山並みの景観、つまり荒々し山並みを鉄平石の小端積みによる壁泉で、穏やかな山並みをサツキツツジの刈り込みで表現しているといえます。



◆壁泉とサツキによる景観

平安後期の浄土式庭園として有名な平泉毛越寺庭園は眺めると、その庭園の美しさはわかりますが、なかなか

庭の解釈まではできません。この浄土式庭園では、「この世に生を受け、おぼつかない足取りで成長した幼児期や、成長につれ遭遇する苦難や荒々しい人生、やがて訪れる穏やかな生活と終焉、そして悲しみや苦しみなどのない世界、極楽浄土の風景」を表現しています。つまり人間の一生を庭園に表現していると言われています。このような解説を理解し、眺めてみると「なるほど」と納得した鑑賞ができます。抽象的な庭園はもちろんですが、どの庭園についてもそこには必ず作者の思いがあります。作者がどのような思いでデザインしたのか、そこに思いを巡らしながら鑑賞すると楽しいかもしれません。



◆壁泉を飾る校歌碑・校章碑と流れ落ちる滝水

この壁泉から流れ落ちる滝は、名瀑といわれる米子瀑布をイメージしたのではないかと考えています。断崖絶壁から流れ落ちる幾筋の滝、この冷たい水に打たれながら荒業を行なうその修業行者、彼らの心境を想像しながら鑑賞をすると違った景観が見えてくるかもしれません。

鎌倉以降、庭園は禅の修行の場としての色彩を強くしてきました。庭園を作る側は、必ず色々な思いを込めデザインしているはずです。日本人は「全てが庭師」といわれるほど自然の中に神々の存在を意識し、その神々を身近な庭に表現してきました。

このような「見立て」鑑賞ができるようになると庭園鑑賞の中上級者だといえます。是非、意識するようにしてください。

壁泉には校章、校歌が刻まれたプレートが埋め込まれています。このプレートの配置が壁泉の視覚的な重心にバランスを与え、見る側に景観の安定感を出しています。このプレートがなければ、右側にあるカスケード（水階段）と泉口が目立ち過ぎ、左右で景観の重心バランスを欠いたものとなってしまいます。左の奥の校章と中心の校歌、そしてカスケード、泉口があることによりバランスが取れるのです。この壁泉のデザインも大変、考えられたものといえます。

須坂市は生糸の町として、きれいな水を古くから大切にしてきました。その証拠に貯水場や水路には一級の石材である御影石（花崗岩）が使われていたそうです。そのような歴史的な背景もこの壁泉やロータリー庭園の水路にも影響しているのかもしれない。

次にグラウンドのバックネット裏側にあたる景観についてです。ここはトチ並木に続き、2本のヒマラヤスギの高木が立っています。強い剪定をしたために枝の透いた状態となっていますが、数年たつと成長が早いので、枝葉が茂った状態となりグラウンドの景観が隠される設定だと思えます。しばらく間隔をあけ、コロラドトウヒが植えられ、この手前にはヤマボウシ、ヤマモミジ、アラカシ、ヒイラギモクセイ、ハナミズキなどが植えられています。手前は御影石（花崗岩）の縁石が曲線を描き、それに合わせるようにサツキツツジの刈り込みで曲線のラインを強調しています。見てわかるように、植栽が多く混んでいるところは大変美しい景観を構成しています。



◆「蛍雪の碑」と周辺の全景



◆「蛍雪の碑」の全景

これは、景観の背景が植栽により作られているからです。たとえていうと、盆栽の後ろを衝立などがあるなしではその見え方も変わります。この衝立の効果により、この景観がきれいに見えるのです。また、人間の視界は俯角 10° ～ 15° が中心ですが、意識しないで見える仰角の範囲は 27° くらいだと言われています。この自然に見える視界を意識した景観作りが重要なのです。

これとは逆に「蛍雪の碑」あたりからサツキツツジの背景に植栽がなくなり、空間が空いてしまっています。高木がなくグラウンドが見えるようなところは、手前の景観もなかなか生きてきません。人間は写真のようにきれいなところだけを見ることはできないのです。この「蛍雪の碑」の付近から左側も、右側と同じような植栽をすることで全体がさらに引き締まった景観になると思います。

サツキツツジの中に現代アートであろう球形の灯籠が配置されています。これも何げない添景物のように見えますが、景観全体にアクセントを与え、欠くことのできないものとなっています。サツキツツジのシルエットラインが、曲線を描きながら長く続くことで空間の広がりを感じさせています。

この景観の解釈、見立てについては、サツキツツジの刈り込みで緩やかな山並みを描き、石碑を山頂に突き出た岩肌に見立てた景観となっています。この石碑は定時制課程が廃止となった記念碑として建てられたものようです。この石碑が東向きに設置されていることも定時制を意識したことなのかもしれません。この石碑も学校の歴史を語る大切な景観といえます。

この「蛍雪の碑」と壁泉の庭園の景観は、景観の連続性を演出しデザインされています。まず、どちらも鉛直に伸びる直線的な針葉樹の高木で森の景観、その手前にはモミジ、ヤマボウシ、ナツツバキ等の落葉広葉樹でソフトな景観、手前はサツキツツジの刈り込みによる曲線のシルエット、そして両庭園のアクセントになっている岩石を使った壁泉と石碑のモニュメント、それぞれを連なる山並みとしていることで、違和感のない連続した景観として認識できるのです。このように景観に連続性を持たせることで、狭い空間も広く感じさせることができます。

そしてこのふたつの連続した景観としての美しさを眺めることができる地点は、写真のようにロータリーを北側に少し移動したところとなります。振り返ってみると写真のような景観が広がります。緑あふれる植栽の中に小端積みによる壁泉と校歌や校章のプレートの埋め込み、手前にはサツキツツジの曲線のシルエット、石碑、モダンな灯籠、ヤマボウシなどの植栽、この庭園を鑑賞するふさわしい地点のひとつがこことなります。

最後に、この空間の中心をなしているロータリー庭園についてです。特徴はロータリーであることを感じさせないことにあります。通常、ロータリーは車の旋回用に作られた円形のスペースです。このスペースの中に主木となる樹木が植えられたり、モニュメントが置かれたり



◆モダンなデザインとなる円形型の灯籠



◆おすすめの景観鑑賞スポット



◆ロータリー庭園の全景

しながら建物と調和がとれるようデザインされています。建物と庭園は一体の景観であり、それぞれ別々な景観となることはできません。名園といわれるものは建築物と庭園とが一体をなしています。金閣寺の建築物が美しいのは周囲を池や緑で囲む庭園によるところが大きいといわれています。このようにロータリー庭園は全体の景観作りに大きな影響を与えます。

この視点からこのロータリー庭園を見てみましょう。10mを超すモミジの株立ちの高木が多く植えられ、中高木にヤマボウシの株立ち、そして玉作りのドウダンツツジの植栽となっています。高木、中高木により建物がほとんど隠れ、わずかに玄関付近が見えます。そのため、来客者は玄関までのルートがわかるようになっています。この玄関から東側は、ヨーロッパ、特にドイツの自然風景式庭園、森を切り開いたような開放的な空間が広がり、建物の近くにはチャボヒバ、ドウダンツツジの刈り込みが等間隔に列植されています。自然風景式の庭園の特徴は、全体的に自然の風景を演出し、建物付近は整形形式庭園の技法を用いています。古くから造園科を設置している高等学校ということ強く意識し、さまざまな形式の庭園を典型的に作っているところに、「庭園の教材化」を意図したことがうかがえます。しかも、様々な顔を持つ庭園をランダムに羅列するのではなく、景観を美しく見せる構成のアルゴリズム（問題を解決する方法や手順）があるのかのごとく、どの地点、角度から見ても、どの景観を中心に据えて眺めても、美しい景観を見せてくれているところがこの前庭の



◆チャボヒバ・ドウダンツツジの列植



◆ロータリー庭園の石張り流れ



◆ロータリー庭園の形状

構成の素晴らしいところです。

この空間のコア（中心）というべきロータリー庭園ですが、この景観がロータリーそのものになってしまうと、単なるロータリーの景観となってしまいます。造園では「役石」という役割を明確にし、厳格に配置された石があります。それに対して「捨て石」というものがあります。役割が明確でない石です。しかし、景観を構成するには、何げなく置かれたこの「捨て石」が「役石」のわきを固めることで美しい景観を作り出すことが多いのです。この前庭を構成するいくつかの庭園も、それぞれの役割を明確に果たしながら、役割を感じさせない景観構成となっています。このロータリー庭園もロータリーの役割を認識せず、周囲の景観との一体感を意識しながら造られています。

ロータリーに見せない工夫は、中に道を通すだけでなく、他にもいくつかの点に見ることができます。

まず、周囲の縁石の石張りを高くせず、仰々しく囲ってないことです。次に、この縁石を鉄平石の不規則な線の組合せを使い、ロータリーの敷地を整形的な楕円曲線に見えないようにしています。人間は画像を見たとき、線や面をつなげ特定の形として認識しようとする意識が働きます。おそらく、このロータリーは測量をすると写

真でわかるように幾何学的な楕円の形となっています。しかし、鉄平石のランダムな線の組合せることで、私たちに楕円でなく不規則な形として認識させているのです。

さらに、この前庭を囲むようにそびえるトウヒなどの針葉樹の高木が作り出す鉛直の直線に合わせ、真直ぐに伸びる株立ちのモミジやヤマボウシの高木を植栽し、狭い空間の中に多くの垂線を描き出しながら、前庭全体との一体感を演出しています。そして、中心に園路を通し、水路を重ねることでロータリーの役割を隠すだけでなく、他の役割を与えるという手の込んだデザインが施されています。

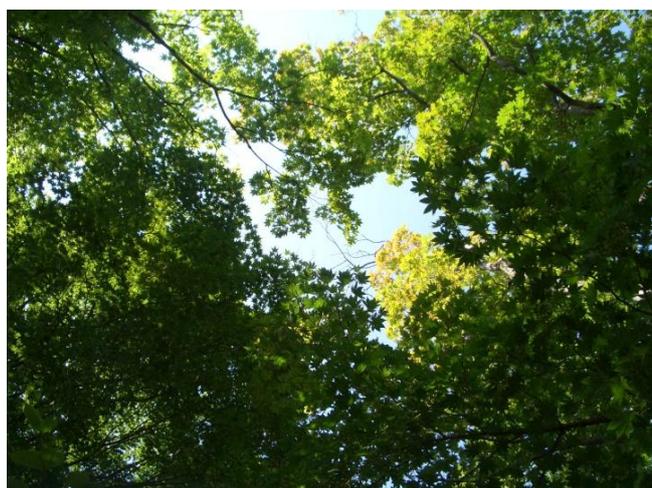
この園路は御影石の整形の切り石と鉄平石を組合せて構成され、5cmほど低い高さで水路が作られています。この御影石と鉄平石の組合せは、造園的な技法としてそれぞれの色合い、肌合いの違いをあえて組み合わせることで「侘び錆び」の風情を醸し出しています。また、御影石の切り石を進行方向に向かって平行に配置することで遠近感を出し、そこに10cm程の高低差で階段を配置することで、さらに遠近感を強調しています。

また、この短いロータリーの奥行きを長く見せるため、さらなる工夫が凝らされています。その工夫とは、水の流れの延長距離を長くしていることです。つまり水路を蛇行させるだけでなく、横行方向にも流し、水路の長さを直線距離の数倍長くしながら、短い距離を長く感じさせる心理学的な演出を用いています。また、このように水路を蛇行させることは、少ない水量を少なく感じさせない工夫でもあります。

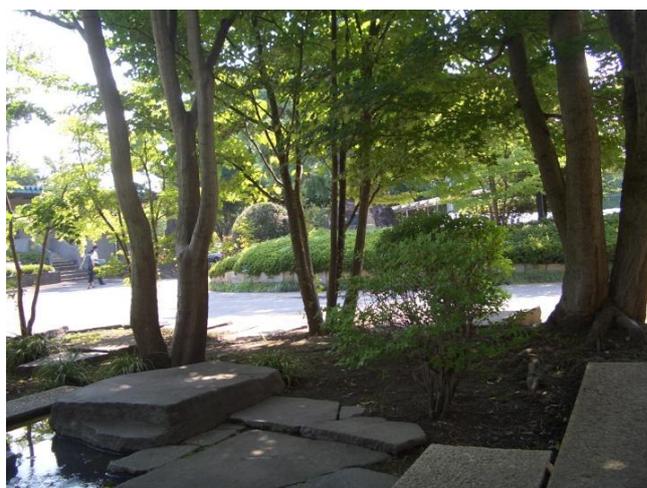


◆反対方向からの景観

この庭園内を歩いてみると、水平的な距離の実感が実際よりもかなり長く感じます。園路には水が流れ、段差があるため、足元に注意し、流れを渡りながら、高木に囲まれた園路を少しずつ歩いているからです。人間は道程の長さを経験値として予想し、かかる時間を予測します。たとえば、山道で上りと下りとでは、同じ距離でも時間のかかる上りの方が長く感じてしまいます。このロータリーの直線距離は5～6秒ほどで通り抜ける長さで



◆モミジの高木が上空を



◆木立の隙間から見える景観

すが、そこに段差や水路といった変化を作ること、時間を長く感じるようにしてあるのです。

アスファルト舗装からロータリー庭園内に入ってみると、園路が高木に囲まれているので、林の中を歩いているような感覚となり、外から眺めた感じとは違う風景に驚かされます。見上げると10mを超すモミジの葉に覆われ、夏などは太陽の日差しは遮られ、驚くほどの涼しさを感じます。足元の鉄平石の石畳を流れる清流が更に

涼しさを大きくしてくれます。

街中や山道を歩いていると、環境や景観が急に変わったところで、足を止めることがあると思います。この驚きを庭園内に入ると感じ、自然と足を止めてしまうのです。多くの庭園は遠くから眺めた景観と、実際に中に入った景観にそれほどの違いはありません。この庭園を理解するには眺めるだけでなく、実際に中に入ってみなければ構成について理解ができません。

よく「都会のオアシス」という言葉が使われますが、園内には多くの野生の小鳥が訪れ、水遊びをしている光景を目にします。小鳥たちにとってこの庭園内は、この言葉通りオアシスなのかもしれません。

この園路を通り玄関まで歩いていくと、園路の終わりには湧水口があります。ここから反対（入り口）方向を見ると木立の隙間から壁泉などの景観が広がっています。このような木立を障りとして作りだされる壁泉の景観も絵画的な風景の一つかもしれません。



◆道標型灯籠の石碑

この庭園の入り口には道標（みちしるべ）型灯籠が置かれ「道 古人の後を追わず、古人の求めたるを求む」と記されています。この文は、松尾芭蕉が元禄6年に門弟許六との別離に際し送った手紙の一節です。この中で南山大使（弘法大師空海）が書道について語ったことを引き合いにし、この言葉を続けています。意味は「先人の表面的な見える足跡を追い求めるのではなく、目に見えなくても真に心から求めたものを見つめ追求することが重要である」といったことになると思います。おそらく、農業高校の記念碑として、農業を学ぶ生徒たちに対し、「農業の生産技術や知識、業績のみを追求するのではなく、農業の大切な本質について追及してほしい」との願いが込められているのでしょう。まさに時々の時代の趨勢に翻弄され続けてきた農業、その農業に携わる者たちへの強烈なエールのような気がします。「蛍雪の碑」「農は国の本なり」石碑と並び、須坂園芸高校の歴史や未来を語る碑といえるでしょう。

おわりに

このロータリー庭園を含めた前庭の景観の特徴をまとめると、ひとつは周囲に鉛直方向の直線を使い空間設定していることです。つまり、トウヒなどの常緑針葉樹の直線的な高木、中高木に落葉樹の株立ちの多く用いることで鉛直方向の線を強調しています。次にサツキツツジの刈り込みによる緩やかなシルエット、芝生による緩やかなマウンドのシルエット、この二つの異なったテクスチャ（表面の質感や手触り感）を使いながらランドカバー（地面を緑に覆うこと）をし、緩やかな自由曲線のシルエットの組合せによって、連続性のある空間を作っていることです。このことにより、それぞれ異なった景観を違和感なく、一体感のある空間にしているのです。そして、この景観の中に石碑や像、壁泉、流れなどをところどころにうまく配置しながら、絵画的風景を散りばめています。

残念な点をあげるとすると、ロータリーのアスファルト舗装が老朽化により劣化しています。きれいな舗装に変わるとこの景観全体がひきしまり、風景は大きく変わると思います。

いかがでしたか。

この鑑賞ガイドであなたの庭園の見方が深まり、庭園鑑賞の楽しみの一助となればと願っています。